

日 本 大 学 理 工 学 部

一 般 教 育 教 室 彙 報

第 117 号

目 次

— 論 文 —

中学校数学科教師の授業観と生徒指導観に通底する価値観とその構造 …………… 大越 健斗 …… 1

— 研究動向一覧表 — …………… 13

2025 年 10 月

中学校数学科教師の授業観と生徒指導観に 通底する価値観とその構造

大 越 健 斗

(令和7年7月7日受理)

The Relationship and Structure of Middle School Mathematics Teachers'
Perspectives on Instruction and Student Guidance

By Kento OKOSHI

(Accepted July 7, 2025)

1. 問題と目的

1-1. はじめに

日本の教師は、教育基本法に基づき「人格の完成」を目指し、教科指導と生徒指導の両方において中心的な役割を果たす。特に中学校数学科教師は、学問的側面が強く「明確な系統的・構造的知識・技能」の形で「記憶・理解・習得」すべきものとしての教科指導¹と、生徒が社会の中で自分らしく生きるための成長発達の支援としての生徒指導²という性質や目的の異なる2つの領域において指導が求められる。それゆえ中学校数学科教師ならではのジレンマや矛盾が生じる可能性がある。

そこで本研究では同一の中学校数学科教師に対して授業観と生徒指導観を検討した研究結果^{3,4}を踏まえ、中学校数学科教師が異なる2つの領域で価値観をどのように保持・調整しているのかを明らかにすることを目的とする。

1-2. 用語の定義

教師の信念を対象にした研究においては信念の定義が曖昧であり、研究ごとに微妙に異なることが指摘されている⁵。そこで本研究における信念に関連する用語（「信念」、「授業観」、「生徒指導観」）の定義を提示する。

「信念」（以下、単に信念と記す）とは、教育の分野に限定せず、その教師が重視している考え（価値観）を指す。例えば、「困っている人がいたら助けるべきだ」といったものが挙げられる。「授業観」（以下、単に授業観と記す）とは、授業において重視している考え（価値観）を指す。「生徒指導観」（以下、単に生徒指導観と記す）とは、生徒指導において重視している考え（価値観）を指す。つまり、本研究では「○○観」を「○○領域における価値観」として定義する。

1-3. 信念研究の課題

中学校数学科教師において、授業観⁶、生徒指導観⁷をそれぞれ独立に検討した研究は存在するが、両者の関係性を踏まえて検討した研究は極めて少ない。また、信念間の関係を検討した研究も、中学校数学科教師に限らず極めて少ない。

信念間の関係を検討した数少ない研究として笹谷らの研究⁸がある。笹谷らは、同一の公立小学校2年生の3学級を対象に、国語科の授業と学級経営観の関係を検討し、授業方法において学級経営観との関連が強く見られたことを指摘している。ただし、これは学級担任制をとる小学校、また国語科の事例であり、中学校数学科にそのまま適用できるかについては慎重になる必要がある。特に中学校数学科の授業と生徒指導というように性質や目的が異なる領域においては、信念間の対応の強さ以外にも信念間のジレンマや相互補完性など、さらなる検討の余地がある。

以上を踏まえ、本研究では中学校数学科教師を対象に、授業観と生徒指導観の関係を検討し、教師内における授業観と生徒指導観が互いにどのように影響し合い、保持されているのかを明らかにする。

2. 方法

本研究では大越（2021，2025）にて提示した中学校数学科教師4名の授業観と生徒指導観の分析結果を用いて、教師内の授業観と生徒指導観の関係を検討する。4名の教師の基本情報を表1に示す。なお教師名はすべて仮名である。

表1 協力者の基本情報（名前は仮名）

名前	性別	年齢	学歴	教職歴	勤務校 ※太字は現任校
長野先生	男性	50代	大学卒	27年目	公立→国立附属→公立→ 公立
中島先生	男性	40代	大学院卒	16年目	公立→公立→国立附属→公立→ 国立附属
國近先生	男性	30代	大学卒	14年目	公立→公立→ 公立
渡辺先生	男性	30代	大学卒	9年目	公立→ 公立

調査では半構造化インタビューを2回実施した。第1回インタビュー（201X年7月前後に実施）では、授業観・生徒指導観について尋ねた。第2回インタビュー（201X+1年2月前後に実施）では、第1回インタビューの語りを整理した内容を協力者に提示し、誤りの有無や追加の必要性について確認し、補足的な語りを得た。インタビュー時間は、授業観・生徒指導観についての語りを合わせて各回1人あたり1時間半～3時間程度であった。

なお、協力者の語りの内容（事例やライフストーリー）は考察において影響の出ない形で部分的に編集し、個人を特定できないようにした。また、インタビューの実施年においては教員歴から個人が特定されることを防ぐため201X年（翌年は201X+1年）と表記した。

3. 結果と考察

(1) 各教師の授業観と生徒指導観の関係

大越（2021，2025）での分類を引き継ぎ、授業観は授業観の根幹と授業観、さらに各々の授業観の実現の有無を、生徒指導観

は目指す生徒像と重視する働きかけに分けて記載する。なお授業観と生徒指導観において、授業観の根幹を『』、授業観・生徒指導観を「」, それぞれの信念の背景を【】で囲み記載する。また、授業観と生徒指導観においてはそれぞれ「“仮名のイニシャル” + “A, B, b (授業観を A, 生徒指導観のうち目指す生徒像を B, 重視する働きかけを b とする)” + “n (n は数字)”」で番号を振る。

① 長野先生

①-1. 授業観と生徒指導観

長野先生は『発展的な課題で生徒の興味を喚起する』ことを授業観の根幹としている。抱く授業観は「(TA1) 発展的な課題で生徒の興味を喚起すること」, 「(TA2) 数学が得意な子を暇にしないこと」である。

TA1 の背景には、授業観 TA1 での【成功経験】、授業観 TA1 の実践を支援する自身の【教材知識】、発展的な課題を数学が苦手な子でも取り組めるように再構築する力【能力(得意)】が確認された。なお【教材知識】は長野先生が【ライフストーリー上重大な出来事】と語る国立附属中学校での圧倒的な教材研究の日々により獲得されたものである。TA2 の背景には、長野先生自身が数学が得意であったことに加え、国立附属中学校にて「教科書の内容はすでに分かっているような生徒」を相手に教材研究や授業を行ってきたことも関係している。また、長野先生は TA1, TA2 の両方において対応する授業実践の語りが語られており、それらの授業観を意識して実践できている。

一方、生徒指導観では「(TB1) 生徒自

身が心から納得して」「(TB2) 当たり前のことをすることができ、それを年々高めていく」こと、そして「(TB3) 生徒集団で自律的な管理ができる」集団を目指している。これらは中学生は大人の仲間入りであるという【中学生観】のもと、力で押さえつけていたこれまでの自身の生徒指導に対する疑問(【これで良いのか感】)、自身の教員になったきっかけであるドラマの教師(【理想の教師像】)、教師から与えられたことをやるだけだった【被教育経験の反省】から、当たり前のことをやらされてではなく、生徒が心から納得して善い行いを行うようになってほしいと考えるようになったことを背景としている。

また、生徒指導において重視する働きかけとして、「(Tb1) やるべきことをやれていれば結果が出なくても焦らない」, 「(Tb2) 授業をしっかりと行うことが生徒指導においても大事」という考えを持っている。Tb1 の背景として、長い教師生活で経験した卒業生のその後の立派な姿(【卒業後の姿】)や自身の親としての思い(【親の視点】)から、生徒指導における長期的な視野を獲得した。Tb2 の背景として、附属校での教材研究と授業経験(【ライフストーリー上重大な出来事】)から、授業にて生徒を安定させることができるようになり、授業の重要性に関しても非常に高く価値づけるようになったこと、公立学校では他の同僚は教科指導を軽視しがちであること(【公立校での教科指導の周辺性】)、自身が授業によって生徒と近づけていること(【成功経験】)がある。

①-2. 授業観と生徒指導観の関係

長野先生の授業観と生徒指導観から、「生

徒指導における教科指導（授業）の重視」と「発展的な課題での生徒の興味喚起」に関心を持っていることが推察できる（以下、特に関心を持っている信念の内容を「重視する信念」とする）。そして、その「重視する信念」は【ライフストーリー上重大な出来事】である附属校での教材研究に奮闘した日々を背景に確信されている。

長野先生の「重視する信念」は、主体性を重視する点では授業観と生徒指導観に共通しているが、働きかけにおける実現のしやすさを考えると、教科指導においては実践にて体現しやすく親和的であるが、生徒指導においてはその直接的な体現は難しく親和性は低い。それゆえ授業においては自身の【能力（得意）】と【教材知識】により実践し、生徒指導においては「重視する信念」とは矛盾しないものの別の生徒指導観を抱くことで、生徒指導でも信念に対応した実践を可能にしている。

②中島先生

②-1. 授業観と生徒指導観

中島先生は、『数学の有用性』、『実社会と同じ学び』を授業観の根幹としている。それは数学を学ぶ際に、学校で学ぶことになっているから学ぶというのではなく、生徒自身が学ぶ内容の必要性を感じて学ぶことを重視するという「(NA1) 生徒の問いから授業をつくる」授業観や、知りたいことや求めたいことがあるならば、使えるものは人も道具も使ってよい「(NA2) 実社会と同じ学び」という授業観、授業の中でみんなで新たな知識を作っていくという「(NA3) みんなで考えを作る」授業観として表れている。

授業観 NA1, NA2, NA3 は、自身の生徒時代から続く長年の数学を学ぶ意味に対する疑問と数学の有用性への関心（【もともとの関心】）、自身の「大学・大学院での学び」とそこで学んだ【教材知識】、有益な知見を提示することを目標に使えるものは何を使ってもよい中で執筆した自身の卒論の経験（【被教育経験（肯定）】）を背景にもつ。ちなみに、中島先生が抱く数学の有用性を感じさせる生徒による主体的・協働的な授業をより強固に形成するきっかけとなった大学での数学科教育法との出会いと大学・大学院での数学科教育を専門とするゼミへの所属は、大学初年次までは大学の数学に苦しみ、中退することをも考えた中島先生にとって、極めて重要な意味を持つ出来事であった（【ライフストーリー上重大な出来事】）。また、中島先生も NA1, NA2, NA3 において対応する授業実践の語りが語られており、授業観を意識的に実践できている。

中島先生は目指す生徒像として、「(NB1) 基本的なことを教えるが、基本的なことを教えた後は生徒自身が判断できるようになる」ことを目指している。これは人に押し付けられることが嫌いな自身の性格（【パーソナリティ】）や初任校での締め付ける指導や考えの押し付けに対する否定（【失敗経験】）を背景に重視されている。また、重視する働きかけにおいては、中島先生は【自分に対する自信のなさ】と「卒業後などずっと生徒といわれるわけではない」（【制度的理由】）から、「(NB1) 自身が主とならず生徒自身が自主的に判断して動く」ことを重視している。

②-2. 授業観と生徒指導観の関係

中島先生は教師主導で知識や考え方、規範を教え込むのではなく、「生徒主体」かつ「社会と類似した学び」を授業観でも生徒指導観でも重視しており、それらが「重視する信念」であるといえる。ただし、教科指導においてはNA1, NA2, NA3ともに【ライフストーリー上重大な出来事】、【もともとの関心】、【被教育経験（肯定）】など積極的な動機で抱かれているのに対し、生徒指導観NB1においては「自分に自信がない（【自分に対する自信のなさ】）」「自分も押し付けられるのが好きではない（【パーソナリティ】）」「生徒は卒業する（【制度的理由】）」、以前の勤務校での締め付ける指導での【失敗経験】と消極的な動機から抱かれている。つまり、授業観については【ライフストーリー上重大な出来事】、【もともとの関心】、大学・大学院での学び、該当信念についての【被教育経験（肯定）】のもと確信を抱き、実践に取り組んでいるが、生徒指導観については該当信念と対立する信念に対する否定的な【パーソナリティ】や【失敗経験】を背景としており、生徒指導上で重視する働きかけにおいても【自分に対する自信のなさ】などから消極的な動機で選択している。よって、「重視する信念」であっても、その確信の在り方には積極的／消極的の違いがあることが確認できる。

③ 國近先生

③-1. 授業観と生徒指導観

國近先生は『生徒が社会に出た際の助けとなること』、『数学が苦手な子への気遣い』を授業観の根幹としている。また、授業観

としては「(KA1) 生活を豊かにする助けとなる授業」, 「(KA2) 数学が苦手な子にもわかる授業」, 「(KA3) 演習の重視」を抱いている。しかし, KA1については授業での直接的な達成の困難さから, 実際の授業についての想起は難しく, 具体的に授業実践の想起ができた授業観はKA2, KA3となっている。ただし, あくまでも教科指導の位置づけは周辺的であると語り, 教員になることで生じた初めて人とぶつかる経験（【ライフストーリー上重大な出来事】）を背景とする人間性の指導を重視している。

KA1の背景は語られなかった。KA2の背景として, 目の前のその瞬間の生徒を本気で助けようと思う國近先生の【パーソナリティ】と自身の数学にて「落ちこぼれ」た経験（【被教育経験（否定）】）, 教科指導よりも人格陶冶を中心に考える教育観が確認された。KA3の背景として, 自身の公文式による成功経験（【被教育経験（肯定）】）が確認された。

國近先生の目指す生徒像は, 家庭では教えるににくい他人や目上の人とのやり取りである「(KB1) 礼儀や社会規範の獲得」, そして「(KB2) 人としての優しさを備えた」生徒像である。また, 自主的にクラスの仕事などを行うなど「(KB3) 自主性を備えた」生徒像も含まれる。これらは自身の熱く優しい性格を土台にしつつも, 背景を尋ねた際にはその直接的な根拠となる語りが得られなかった。これは中学校教師として生徒の自主性を促すことはもはや当然のものと考えているためと推察される。また, 國近先生は自身でも生徒指導を特に重視し, 教科指導は周辺的に位置づけていると

語る（「KA4」授業の周辺性）。

國近先生は、「(Kb1) 生徒にぶつかり、自身の本気の姿を見せることで伝える」働きかけを生徒指導上重視している。これは人とぶつかることのなかった大学までの生活に対して、教員になってから生徒とぶつかることを強いられ、同僚からの学びもあり、生徒と本気でぶつかることができるようになった【ライフストーリー上重大な出来事】、中学校時代は問題も多く、ぶつかる指導をしてきた生徒が、卒業後に立派に保育士をしている姿を見るなど、自身のぶつかる指導に対する成果を感じた【成功経験】を背景に持つ。ただし、ぶつかる指導では伝わらなかった経験もあることから、ぶつかるだけではなく、語って聞かせたり、ぶつかった後に落ち着いて話し合うなども重視しており、あくまでも「(Kb1) の補足」伝わるのが第一」と考えている。また、学級経営において生徒が自主的にクラスのために動いてくれたことに気付いた際は明示的にお礼を言うなど、「(Kb2) 明示的な承認」という働きかけも重視している。これは國近先生の熱く素直な性格から生じた働きかけであるが、保護者からのお礼や生徒の家の様子のお話も聞き、その働きかけの重要性を認知していたこと（【成功経験】）も背景にある。

③-2. 授業観と生徒指導観の関係

授業観、生徒指導観の両方において、自身の性格であり、重視している人間的な「優しさ」（【パーソナリティ】）を土台とし、それに加えて人と初めてぶつかる経験（【ライフストーリー上重大な出来事】）を背景に「人としての優しさの重視」が「重視する信念」として抱かれている。「重視

する信念」から生じる生徒に対する優しさを、授業では「数学がわからなくてつらい思いをする生徒が出ないように」という形で、生徒指導では「規範や優しさを身に付けてほしい」という形で実践している。教科指導においては「重視する信念」を直接的な目標にすることが難しい一方で、生徒指導では直接的な目標にしやすい。この特性が KA4 の背景にあることが推察される。ただし、教科指導においても「重視する信念」に関わる信念 KA1, KA2 を抱き、可能な範囲で実践に移そうとしてもいる。

学生時代まで他大学の数学教育のゼミに参加し、その大学の大学院を受験し合格するなど数学教育に強い関心があった國近先生が、教職に就いてから生徒指導を重視するようになった背景に、これまで人とぶつかる経験をしてこなかったにもかかわらず、初任校で問題を抱える生徒と取っ組み合いになるほどにぶつかった経験がある。この初めて人とぶつかる経験をするという【ライフストーリー上重大な出来事】が、國近先生のもともと持っている人間的な「優しさ」と合わさり、「重視する信念」が強く確信されるようになったと推察される。

④ 渡辺先生

④-1. 授業観と生徒指導観

渡辺先生は、『社会に出てからの助けとなること』、『楽しい授業の経験』を授業観の根幹としている。

授業観としては、「(WA1) 社会で生きていく力をつける」を抱いており、その背景には個別級とのかかわりの経験（「個別級の経験」）、自身の手で3年生を卒業させたときに感じた受験を突破させるだけでは不

十分だと感じた経験（【教育経験（否定）】）、進路指導主任という【立場】がある。個別級との関わりや3年生を送り出した経験から、高校受験だけがすべてではないと実感しており、現在の進路指導主任という立場から生徒の進路全体（入試対策だけではなく、人生というスパンから進路を考える）を考えるようになり、高校受験を絶対視せず生徒の社会に出てからのことを考えるようになった。また、社会に出てからの進路を重視するのは渡辺先生自身の人生経験も影響している。渡辺先生はこれまで就きたい仕事ややりたいことを明確にして人生の選択をしてきたわけではなかった。そのため、社会に出てからのことや就職のことが自身の人生の反省とも重なり、重視していると推測できる（【ライフストーリー上重大な出来事】）。ただし、WA1については対応する授業の語りは得られず、実践での体現に困難があることが示唆される。

一方、渡辺先生は「(WA2) 楽しい授業を経験してほしい」も重視している。その背景には、ただ強制されるだけの指示は嫌に感じるという自身の性格（【パーソナリティ】）や、強制させるだけでは子どもが嫌な気持ちになり教科知識も身につかないため、まずは興味を持ってもらうことが大事である（【興味の重視】）との考えがある。また、なかなか自主的に授業に臨むことができない生徒が一定数いたという環境もまた、自然と前を向かせて授業に臨ませたいという授業観を抱くきっかけになっている（【環境】）。WA2に対して、雑談をすることにより自然と生徒に前を向かせて授業に入っていくという【授業方法の知識】や生徒自身が手を動かすような活動を授業

に取り入れることで、授業が生徒にとっての楽しく豊かな経験となる実践をしている。これらは普段は授業に参加しない「ワル」が尊敬する先輩教師の授業には参加している姿を見たときの驚き（【印象に残った他教師の授業】）、また、その先輩教師から学んだ【教材知識】、雑談が好きであるという自身の【能力（得意）】を背景に持つ。WA2は対応する授業実践が語られており、意識的に実践できていることが示唆される。

渡辺先生は生徒指導において目指す生徒像として「(WB1) (就業を中心とした) 社会で生きていく力」, 「(WB2) 自分で将来を考え、自分で決めること」を挙げている。これは先ほど述べた自身のキャリア選択とかかわる【ライフストーリー上重大な出来事】と現在の進路指導主任という【立場】を背景に持つ。

また、重視する働きかけは「(Wb1) 成績で進路を絞らず、自分で将来を考えさせる」である。Wb1の背景には自身が将来について十分に考えてこなかったという反省（【ライフストーリー上重大な出来事】、【被教育経験（否定）】）と、中学生の進路選択に関わることが強いられる今の進路指導主任という【立場】があり、さらに自分の将来をもとに進学先を決めた生徒のその後の立派な姿（【成功経験】）がある。

④-2. 授業観と生徒指導観の関係

授業観 WA1 と生徒指導観 WB1, WB2, Wb1 に通底する「社会で生きる力を身に付けさせること」, 「そのために自分の将来について自分で考え自分で決めること」が渡辺先生の「重視する信念」として推察される。この「重視する信念」は進路指導主

任という【立場】と就職などについて考える機会を持たずに教員になったことへの気がかりとそんな自分が若くして進路指導主任を任されたという【ライフストーリー上重大な出来事】を背景にしている。ただし、授業観 WA1 は数学科の授業という枠組みでは実施が難しく、実現には困難を抱えている。一方、授業観 WA2 は数学科の授業の中でも WA1 に矛盾せず実現が可能であり、実際に実践できている。この授業観は渡辺先生の【能力】や【パーソナリティ】とも親和的であるとともに、勤務校の生徒の様子（【環境】）に対応して抱いた授業観である。また、社会に出る生徒に対しても授業が楽しく豊かな経験となり、数学への嫌悪感を減らし、最低限の教科知識を身に付けることにも寄与することを目指して抱かれたものでもある。よって、「重視する信念」に強く対応する授業観 WA1 を抱きつつ、その実現が授業という枠組みでは難しいことから、授業という枠組みで実現可能な授業観 WA2 も抱き実践することで、自身の教職アイデンティティを保持していることが推察される。

(2) (1) を踏まえた教師の授業観と生徒指導観の関係

各教師の授業観と生徒指導観の関係とその背景を検討すると次の2点が示唆される。

①「重視する信念」の背景の特徴

一つ目は「重視する信念」の背景の特徴である。授業観と生徒指導観に通底する内容、授業観においては実践についての具体的な語り、生徒指導観においては目指す生徒像と重視する働きかけの対応から、それぞれの先生の「重視する信念」を同定した。

その結果、長野先生は【ライフストーリー上重大な出来事】である附属校勤務の経験と自身の【能力（得意）】を背景に、「生徒指導における教科指導（授業）の重視」と「発展的な課題での生徒の興味喚起」を、中島先生は【ライフストーリー上重大な出来事】である大学・大学院での学びとそこで学んだ【教材知識】と【授業方法の知識】、【もともとの関心】である（数学の）有用性を背景に「生徒主体」と「実社会との接続（日常での有用性）」を、國近先生は【ライフストーリー上重大な出来事】である人と初めてぶつかる経験と自身の困っている生徒がいれば助けたいと思う優しさを重視する性格（【パーソナリティ】）を背景に「人としての優しさ」を、渡辺先生は自身が進路について十分に検討せずに現在まで来ているという反省【ライフストーリー上重大な出来事】と若くして任された進路指導主任という【立場】を背景に「社会で生きる力を身に付けさせること」、「そのために自分の将来について自分で考え自分で決めること」を、「重視する信念」としている。ここでの「重視する信念」はすべて【ライフストーリー上重大な出来事】を背景に確信されており、【ライフストーリー上重大な出来事】が「重視する信念」の確信の大きな根拠となることが示唆された。

②「重視する信念」の各領域との親和性の違いとその際の対応

二つ目は、「重視する信念」の各領域との親和性の違いとその際の対応である。

長野先生の「重視する信念」は、教科指導に親和的であり、長野先生の【能力（得意）】と【教材知識】により体現を可能にしている。一方、「重視する信念」は生徒

指導においては直接発揮することは難しいが、「重視する信念」とは別に生徒指導独自の信念を抱くことで生徒指導においても自身の生徒指導観に対応した実践を可能にしている。中島先生の「重視する信念」は、教科指導においても従来の一斉指導の授業スタイルや脱文脈化された課題の教授・演習との親和性は低いが、中島先生が大学・大学院で学び培ってきた【教材知識】と【授業方法の知識】により、重視する信念を授業場面においても実践することを可能にしている。生徒指導とも親和性は低くなく、教えることは教えつつも、残りは自主的な判断に任せるといった形で実践につながっている。國近先生の「重視する信念」は、教科指導との親和性は低い。結果、國近先生自身の生徒への愛情と優しさを持った対応にて部分的に体现しているものの、直接的な実践には困難を抱えている。それもあってか教科指導は周辺的であると語り、親和性の高い生徒指導に強い関心を持っている。重視する働きかけは「重視する信念」と対応したものとなっており、実践にて体现していることがうかがえる。渡辺先生の「重視する信念」は、教科指導との親和性は低い。結果、授業での実現には困難を抱えている。しかし、「重視する信念」に矛盾しない授業観 WA2 を抱き、その授業観を実践では体现している。一方、生徒指導とは親和的で、自身の立場（生徒指導主任）のもと重視する働きかけにて実践にて体现している。

「重視する信念」と教科指導領域・生徒指導領域との関係から、「重視する信念」が両領域と必ずしも親和的であるとは限らないことが確認された。親和的な領域にお

いては、自身の知識や能力とも組み合わせりうまく実践にて体现することができが、親和的でない領域においては実践にて体现することが難しいことが確認された。ただし、「重視する信念」と親和性が低い領域においても、自身が重要だと考える信念を別に持ち「重視する信念」とは独立に体现することや、実践方法を工夫して「重視する信念」と関わる形で実践にて体现している場合も確認された。また、領域との親和性が低く実践での体现に困難がある信念内容であっても、【ライフストーリー上重大な出来事】と関連が強いことや、他領域では充実感を持って取り組んでいることなどを背景にその信念が保持されている可能性が示唆された。

4. 総合考察

(1) 総合考察

本研究は、教科指導と生徒指導の両方で中心的な役割を担う日本の中学校教師のうち、特に生徒指導と距離のある教科内容を担当する数学科教師において、授業観と生徒指導観がどのように保持・影響し合っているのかを明らかにした。具体的には、(a)「重視する信念」は【ライフストーリー上重大な出来事】を背景に確信されること、(b)「重視する信念」の教科指導・生徒指導領域との親和性には差があること、(c)「重視する信念」と親和的な領域では自身の【能力(得意)】や【教材知識】のもと「重視する信念」を実践に体现するが、親和的ではない領域においては、①矛盾しない別の信念を抱き実践する、②実践方法を工夫することで「重視する信念」と関わる形で実践につなげる、③実践が難しい、(d) 実

践が難しい信念であっても、別の領域では親和性が高く実践ができており、【ライフストーリー上重大な出来事】とのかかわりが強いことを背景にその信念が保持されている可能性があることが示唆された。

これらの知見は、小学校の国語科の授業と学級経営観においてその対応の強さを指摘した笹谷ほか（2016）に新たな視点を提示している。具体的には、教科指導と生徒指導の目的・性質に違いがある中学校数学科教師においては、領域間に通底する信念の存在を確認しつつも、ある領域において親和性が低い信念があること、ただしそれが他領域での充実感を伴った実践や教師としてのアイデンティティを支える【ライフストーリー上重大な出来事】を背景に保持されている場合があるといった信念の確信構造を示唆した。

(2) 実践への示唆

本研究の提示した知見は、教員の授業観や生徒指導観を捉える際、その信念が他領域で果たしている役割やその教師にとってのライフストーリー上の意味を加味する必要性を示唆している。例えば、ある教師が数学の授業においての実現が難しい信念を保有していたとしても、その信念を適当でないとするのではなく、【ライフストーリー上重大な出来事】やその信念のその教師にとっての意味、他領域（例えば生徒指導）でのその信念の果たしている役割を踏まえてその信念を理解するという視点を持つことができるだろう。また、自分の信念を他領域での信念との関係で理解し、改めて自分が教師として重視するものを考える助けにもなるだろう。

(3) 今後の課題

本研究の課題として、信念間の関係を授業観と生徒指導観に限定して検討した点が挙げられる。本研究は領域間における信念の関係の特徴を捉えるべく授業観と生徒指導観に限定して関係を検討した。しかし、教員は学級経営や学校運営、外部とのやり取りや事務的作業なども行っている。そのため本研究の知見は、教師の信念体系を授業観と生徒指導観という限定された側面から関係を検討したに過ぎない。今後はその他の領域を踏まえ、より広範な領域から教師の信念体系を捉えることが必要である。

謝辞

大変お忙しい中、誠実に自身の実践を振り返り、本研究に協力してくださった4名の先生方に心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 1 安彦忠彦（2009），学校教育における「教科」の本質と役割、『学校教育研究』，第24巻，20-31.
- 2 文部科学省（2022），『生徒指導提要』東洋館出版社
- 3 大越健斗（2021），教師の授業観の実践を支援する／困難にする要因とその構造－4名の中学校数学科教師の授業観と実践の語りの比較から－，『数学教育学研究』第27巻1号，47-68.
- 4 大越健斗（2025），中学校教師の生徒指導観にはどのような特徴があるのか－中学校数学科教師のライフストーリーと生徒指導観の確信背景を踏まえた考察－，『教師学研究』第28巻2号，印刷中
- 5 Pajares, M., (1992), Teachers' Beliefs and Educational Research: Cleaning Up a Messy

Construct, Review of Educational Research, Vol 62

(3), pp.307-332.

6 大越健斗 (2021), 前掲書

7 大越健斗 (2025), 前掲書

8 笹谷考充・森脇健夫・秋田喜代美 (2016), 小学校教師の学級経営観と授業実践の関係の検討, 『三重大学教育学部研究紀要』第 67 巻, 教育科学, 375-388.

凡 例

- この一覧表は日本大学理工学部及び短期大学部（船橋校舎）一般教育教室の教員の研究業績を発表形式別に採録したものである。
- 論文等，口頭発表，著書について 2024 年 4 月 1 日より 2025 年 3 月 31 日までの業績を記しており，その記載法は次のとおりである。
 - 論文等（A. 論文・研究ノート，B. 翻訳・翻刻・評論・解題，C. その他）
 - 筆者名
 - 題名
 - 掲載誌名
 - 巻，号，頁
 - 掲載年月（[] 内に示す）
 - 口頭発表
 - 発表者名
 - 題名
 - 発表学会名
 - 発表年月（[] 内に示す）
 - 著書
 - 著者名
 - 書名
 - 発行所名
 - 発行年月（[] 内に示す）
- おのおの発表形式においては，分野別研究者五十音順とし，連名の場合は主たる者に○印を付した。
- 申し出のあったものだけに限り掲載した。

< 論文 等 >

A. 論文・研究ノート

天 野 聖 悦	安全保障上機微な発明と学問の自由の制限	憲法研究（憲法学会） 第 56 号，pp.19-39	[24. 6]
藤 木 秀 明	教養教育科目「科学技術と経済」の設計と実践	『教職研究・実践紀要』 日本大学理工学部一般教育教室 第 8 号，pp.40-49	[25. 2]
藤 木 秀 明	地方創生における指定金融機関の関与動向—内閣府「地方創生への取組状況に係るモニタリング調査」の分析から—	『東洋大学 PPP 研究センター紀要』 東洋大学 PPP 研究センター 第 20 号，pp.1-29	[25. 3]
郭 海 燕	東亜視域下的金允植《領選日記》	『東亞漢學研究』 2024 年特別号，pp.67-77	[24. 6]
郭 海 燕	甲午戦争與日本構築日台電報通讯网之研究	『甲午戦争与近代國際秩序の嬗変：記念甲午戦争 130 周年國際學術研討會論文集』 上，pp.58-69	[24.11]
郭 海 燕	従境内到域外：中国近代化與宗藩体系視域下的電報事业	『湖北社会科学』 2025 年第 2 期，pp.165-176	[25. 2]
柳 武 司	温度を表す形容詞 lau と日本語の「ぬるい」の意味についての一考察	桜門ドイツ文学会「リュンコイス」 第 58 号，pp. 69-83	[25. 3]
○Katsuro Kitamura Yuichiro Matsuura Toru Nakajima	Practical research on the use of digital pens in high school rugby club activities	Journal of Digital Life 4 S4 DOI:10.51015/jdl.2024.4.S4	[24. 4]
○Katsuro Kitamura Yuichiro Matsuura	Visualization of Motion Image by Humanoid Input Device for Shooting Motion in Basketball and Its Effectiveness	Journal of Digital Life 4 S7 DOI:10.51015/jdl.2024.4.S7 Special Awards（特別賞受賞）	[24. 4]
北 村 勝 朗	大学体育の新たな視座：STEAM 教育から STEAMS 教育へ	体育・スポーツ教育研究 Vol.25（第 1 号），pp.38-42	[24.12]

-
- | | | | |
|--|---|---|---------|
| ○ 鈴木 功 士
山 辺 芳 | 競技用ウェア生地のマクロ粗さとミクロ粗さの組み合わせによる空力への影響 | スポーツ・アンド・ヒューマン・ダイナミクス講演論文集
Vol.2024, pp. U00051
DOI:10.1299/jsmeshd.2024.u00051 | [24.11] |
| 柴 山 英 樹 | 道德教育の指導方法と想像力の育成に関する一考察 ―道德授業の指導方法としての哲学対話をめぐる議論に着目して― | 『教職研究・実践紀要』
日本大学理工学部一般教育教室
第 8 号, pp.20-32 | [25. 2] |
| Takefumi Igarashi | The second critical exponent for a time-fractional reaction-diffusion equation | Mathematics
Vol.12 (第 18 号), pp.1-15 | [24. 9] |
| Van Hao Can
○ Naoki Kubota
Shuta Nakajima | Lipschitz-type estimate for the frog model with Bernoulli initial configuration | Mathematical Physics, Analysis and Geometry
Vol.28 (第 1 号) | [25. 1] |
| ○ Roland Szatmari
Zoltan Halasz
Akio Nakahara
So Kitsunozaki
Ferenc Kun | Discrete element model for the anisotropic cracking of shrinking material layers | International Journal of Solids and Structures
Vol.299, pp.112890-1 - 112890-14 | [24. 5] |
| ○ 佐 藤 正 己
東 條 真 士
小 泉 公志郎
梅 村 靖 弘 | ポゾラン反応性微粉末の混和がセメントペースト中の水和物の炭酸化抵抗性に及ぼす影響 | コンクリート工学年次論文集
Vol.46, No.1, pp.601-606 | [24. 6] |
| 小 泉 公志郎 | セメント系材料のケイ酸構造解析のためのトリメチルシリル誘導体化法の活用 | セメント・コンクリート
Vol.930, pp.7-13 | [24. 8] |
| ○ 東 條 真 士
佐 藤 正 己
小 泉 公志郎
梅 村 靖 弘 | 火山ガラス微粉末とシリカフェームを混和したセメント硬化体の塩化物イオン浸透に及ぼす C- (A) -S-H と細孔構造の影響 | セメント・コンクリート論文集
Vol.77, No.1, pp.245-253 | [25. 3] |
| ○ 吉 澤 拓 人
峯 岸 邦 夫
山 中 光 一
小 泉 公志郎 | 戻りコンクリートと高炉スラグ微粉末を配合した指板改良材のシラス土への適用 | 環境共生
Vol.41, No.1, pp.36-45 | [25. 3] |
| ○ Hirogo
Minamisawa
Kitaru Suzuki
Shiori Kato
Taira Sato
Kanji Tsuru
Yoshiyuki Kojima
Mamoru Aizawa | Material properties of chelate-setting cement from hydroxyapatite powder with high specific surface area and their cytotoxicity | Journal of the Ceramic Society of Japan
Vol.132 (第 10 号), pp.602-608 | [24.10] |

- Noboru Kajimoto Fabrication of resin cements capable of Dental Materials Journal [25. 1]
 Michito Maruta disintegrating by near-infrared radiation Vol.44 (第 1 号), pp.24-33
 Hirogo intended for cemented prosthesis
 Minamisawa removal
 Taira Sato
 Kenichi Hamada
 Kanji Tsuru
- Taira Sato Carbonate content regulation of the set Ceramics International [25. 2]
 Michito Maruta carbonate apatite cement starting from Vol.51 (第 5 号), pp.6654-6659
 Hirogo vaterite and monetite by using various
 Minamisawa sodium phosphate solutions
 Noboru Kajimoto
 Kanji Tsuru

C. その他

- Takefumi Igarashi The second critical exponent for a Preprints.org [24. 7]
 time-fractional reaction-diffusion
 equation
- 三 五 弘 之 (総説) 低温で製造するセメントの Journal of the Society of Inorganic [24.11]
 可能性 Materials, Japan
 Vol.31 (第 433 号), pp.281-288
- 南 澤 宏 瑚 (解説) 水酸アパタイトの特性に及 Journal of the Society of Inorganic [24. 9]
 ぼす高比表面積化の効果 Materials, Japan
 Vol.31 (第 432 号), pp.237-242

<口頭発表>

- 藤 木 秀 明 地方公共団体における銀行等引受債 日本財政学会 第 81 回全国大会 [24.10]
 金利の決定要因に関する分析
- 郭 海 燕 東亜視域下的金允植《領選日記》研究 東亜人文視域中的漢学研究(東京) [24. 7]
 国際学術検討会
 東亜漢学研究學會・陝西師範大学・
 長崎大学主催
- 郭 海 燕 従境内到域外：宗藩体系視域下的電 近代中国與全球治理体系的演变與發展——第九屆中外關係史國際学術 [24.10]
 報電信与中国近代化 検討会(中国・湖州)
 中国社会科学院近代史研究所・近代
 中外關係史研究室・浙江大学近
 現代史研究所共同主催
- 郭 海 燕 日本学界甲午戦争研究評述：視角與 中国朝鮮史研究会 2024 年学術年会 [24.11]
 領域 (中国・广东)
 暨南大学, 中国朝鮮史学会共同主
 催

郭 海 燕	甲午戦争與日本構築日台電報通讯网之研究	甲午戦争与近代国際秩序の嬗変：記念甲午戦 130 周年国際学術研討会（中国・済南） 山東大学歴史学院・山東大学国家革命文物共同研究中心共同主催	[24.11]
郭 海 燕	朝鮮漢文『青又日記』的作者及其史料価値	影劇美学與言語文化国際学術研討会（日本・長崎） 東亞漢學研究學會・山西師範大学・長崎大学・陝西師範大学、陝西理工大学共同主催	[25. 1]
郭 海 燕	中国近代化的域外移植：朝鮮電報通信を中心に	中国與朝鮮半島の關係：從古代到近代国際学術討論会（中国・北京） 北京大学韓半島研究中心	[25. 2]
○北 村 勝 朗 尹 得 霞	コーチングにおける学びの契機としての negative capability の可能性	九州スポーツ心理学会 第 38 回大会	[25. 3]
○一 瀬 輝 星 北 村 勝 朗	エキスパート選手陸上競技選手を対象とした熟達過程の質的分析	九州スポーツ心理学会 第 38 回大会	[25. 3]
○廣 瀬 光 輝 一 瀬 輝 星 北 村 勝 朗	大学陸上競技選手の試合における思考プロセスの分析	九州スポーツ心理学会 第 38 回大会	[25. 3]
鈴 木 功 士	日本におけるトライアスロン指導者育成の現状と課題 ～指導者資格制度の変遷を中心に～	第 14 回トライアスロン・パラトライアスロン研究会	[25. 2]
○平 出 恵利子 黒 田 友 紀	女性管理職の登用の現状と課題：多様な登用ルートの可能性	日本学校教育学会 第 38 回大会	[24. 7]
○佐 藤 仁 ○伊 藤 亜希子 青 木 麻衣子 黒 田 友 紀 内 田 圭 佑 島 埜 内 恵 田 中 光 晴 黒 田 友 紀	教育における多様性，公正，包摂を考える：—OECD 報告書『公正と包摂をめざす教育』を手がかりに— 教師になることと教師であること：教育方法学と教師研究・教師としての成長（課題研究：教師教育における教育方法学—その意義と課題—）	日本教育学会 第 83 回大会 日本教育方法学会 第 60 回大会	[24. 8] [24.10]
Naoki Kubota	Monotonicity of the time constant for the frog model with Bernoulli initial configurations	Random Fields and Processes on Graphs and Fractals	[24. 6]
Naoki Kubota	Divergence of the time constant for the frog model with Bernoulli initial configurations	Japanese–Netherlands workshop “Random Media and Random Fields”	[24. 9]

藤坂系	原元井	克啓千	真紀岳	Talagrand の方法による量子 Parisi 公式	日本物理学会 第 79 回年次大会	[24. 9]
藤坂系	原元井	克啓千	真紀岳	量子 Parisi 公式のための補間法	令和 6 年度第 68 回理工学部学術講演会	[24.12]
○石藤岡村	見丸田上	勝尚真雅	洋子紀彦	アスピリン合成の触媒の比較	日本理科教育学会 第 74 回全国大会	[24. 9]
○佐東小梅	藤條泉村	正真公志郎	己士靖弘	ポゾラン反応性微粉末の混和がセメントペースト中の水和物の炭酸化抵抗性に及ぼす影響	日本コンクリート工学協会 コンクリート工学年次大会 2024	[24. 6]
○梅佐小	東條村藤泉	真靖正公志郎	士弘己	火山ガラス微粉末を混和したセメント硬化体の塩化物イオン浸透抑制機構	土木学会 令和 6 年度全国大会	[24. 9]
○岩佐小梅	倉藤泉村	麻悠美正己公志郎	美己靖弘	フライアッシュとシリカフェームを使用したジオポリマーペーストの配合設計指標	土木学会 令和 6 年度全国大会	[24. 9]
○長佐小梅	田藤泉村	真正公志郎	緒己靖弘	ポゾラン微粉末の違いがセメントペースト中の水和物の炭酸化反応に及ぼす影響	土木学会 令和 6 年度全国大会	[24. 9]
○菅佐小梅	野藤泉村	杏正公志郎	子己靖弘	乾湿繰返し作用がセメント硬化体のケイ酸カルシウム水和物に及ぼす影響	土木学会 令和 6 年度全国大会	[24. 9]
○小小三	林嶋五	怜芳弘	央行之	低温で合成した C_2S と $C_{12}A_7$ 固溶体混合物の水和特性	(社)セメント協会 第 78 回セメント技術大会	[24. 5]
	三	五弘	之	セメント原料に混入した亜鉛の挙動と生成した亜鉛化合物の利用について	(公社)日本セラミックス協会 2025 年年会 セメント部会特別講演	[25. 3]
○南丸梶佐都	澤田本藤留	宏道寛	瑚人昇平治	硝酸銀を用いて作製した炭酸アパタイトセメントの抗菌性評価	第 33 回無機リン化学討論会	[24. 8]
○佐鈴丸梶南相都	藤木田本澤澤留	平来人昇瑚守治		骨髄前駆細胞の初期破骨細胞分化に及ぼす炭酸アパタイトブロック中の炭酸含有量の影響	日本セラミックス協会 第 37 回秋季シンポジウム	[24. 9]

- 田 代 周 正 近赤外線照射により接着強さが低減 日本歯科理工学会 令和6年度九州 [24.10]
 梶 本 宏 昇 可能な歯科用レジンセメントの創 地方会セミナー
 南 澤 田 瑚 製：歯科矯正用アタッチメントへ
 佐 藤 道 平 の応用
 丸 田 幸 人
 玉 置 雄 治
 都 留 寛 治
- 梶 本 昇 近赤外線を用いた補綴修復物除去へ 第66回歯科基礎医学会学術大会 [24.11]
 南 澤 宏 瑚 の材料学的アプローチ
 佐 藤 田 道 平
 丸 田 賢 人
 浜 留 寛 治
 都 留 寛 治
- 南 澤 宏 瑚 バテライト粉体の微構造に及ぼす超 無機マテリアル学会 第149回学術 [24.11]
 佐 藤 田 昇 音波照射の影響 講演会
 梶 本 道 平
 丸 留 寛 治
 都 留 寛 治

<著 書>

- 岸 規 子 伏流する物語―田山花袋の小説を読む 鼎書房 [24. 5]
- 劉 家 峰 『甲午戦争研究資料目録汇编（1894 山東人民出版社 [24.11]
 張 晓 宇 ―2024）』 ISBN：9787209152402
 郭 海 主編 執筆担当：pp.44-69
 他 燕 他
- 間 篠 剛 留 教育と出会いなおすための教育思想 教育開発研究所 [25. 3]
 柴 山 英 編著 分担執筆：第4章 ペスタロッチと
 樹 他 フレーベル―世界を認識するための
 他 の教育

編集規定

1. 本誌は、日本大学理工学部一般教育教室の機関誌であり、その目的を本学部と短期大学部（船橋校舎）に所属する教員の学術研究発表とする。
2. 本誌の発行は、年度内 2 回とする。
3. 本誌には、論文、研究ノート、依頼論文および研究動向の各欄を設ける。
4. 論文・研究ノートは査読制とする。
5. 掲載は編集委員会の決定による。
6. 彙報に掲載された論文・研究ノートは、本教室のウェブサイト上において公開する。

投稿規定

1. 投稿者の 1 人は、原則として本学部と短期大学部（船橋校舎）に所属する専任教員（特任教授を含む）とする。ただし、編集委員会が特別に許可した者は投稿を認めることができる。
2. 投稿する論文等はいずれも他に未発表のものに限る。ただし、口頭発表およびその配布資料はこの限りではない。
3. 投稿は 1 人 1 編とする。
4. 掲載決定後の加筆、訂正は原則として認めない。
5. 投稿者は、編集委員会に ①投稿原稿（英文の題目・氏名を付けたもの）、②邦文要旨（600 字以内）、③投稿者連絡票 を提出する。
注. 原則として電子ファイルで提出すること。
6. 原稿は下記の執筆要領に従うこと。

執筆要領

1. 原稿は、A 4 用紙を使い、原則として横書きとする。
2. 本文・図・表・注・引用文献を含めて、下記のレイアウトで 10 ページ以内とする。
3. 和文 一段組 1 ページ 1 行 40 字×36 行、1 文字 10.5 ポイントとする。
二段組 1 行 19 字×36 行×2 段、1 文字 10.5 ポイントとする。
4. 欧文 本文が 横 15 センチ×縦 20 センチ、1 行 16 ポイント、1 文字 10.5 ポイントとする。
5. 図・表は、論文原稿末尾に貼り付け、本文中に挿入箇所を指定する。
6. 注および引用文献の表示は下記の通りとする。
 - (1) 引用文献は通し番号をつけ本文の後にまとめて記載する。
本文中の参照個所に文献の番号を記載する。
 - (2) 各文献は、「著者名・編著者名」「引用論文図書名」「出版社・発行地」「発行年」「ページ」を記載する。
 - (3) 欧文の場合、著者名は立体、書名は斜体にすること。
7. 表題等の文字の大きさは例文を参照すること。

編集委員（五十音順）

委員長	伴 周一 (Shuichi BAN)	
委員・幹事	中原明生 (Akio NAKAHARA)	
委員	郭 海燕 (Haiyan GUO)	北村勝朗 (Katsuro KITAMURA)
	小泉公志郎 (Koshiro KOIZUMI)	柴山英樹 (Hideki SHIBAYAMA)
	鈴木 孝 (Takashi SUZUKI)	勢力尚雅 (Nobumasa SEIRIKI)
	山崎 晋 (Susumu YAMAZAKI)	
事務局	杉友隆之 (Takayuki SUGITOMO)	

一般教育教室彙報 第117号

発行日 令和 7 年 10 月 30 日
 発行者 日本大学理工学部 一般教育教室
 伴 周 一
 印刷者 日本フィニッシュ株式会社
 高 橋 嘉 久

BULLETIN
OF
DEPARTMENT OF GENERAL EDUCATION
COLLEGE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY
NIHON UNIVERSITY
No. 117

CONTENTS

Articles

- The Relationship and Structure of Middle School Mathematics Teachers'
Perspectives on Instruction and Student Guidance Kento OKOSHI 1

- A List of Recent Studies** 13